

文章 ノススメ

細江宣裕¹

政策研究大学院大学

nhosoe@grips.ac.jp

この小文の位置付け

文章を書く際に何が重要だろうか。ここでは、一経済学者の目から見て、(社会)科学論文が持つべき望ましい性質についていくつか考察する。この小文が述べることは、あくまでも一経済学者の目から見たものであるから、他の経済学者や、他の分野の学者、あるいは学者以外の人間が考えることは違いうる。参考程度に。

¹ この小文は、論文を書き終えたあとで推敲する際に確認すべき事項を最小限度に絞って書き留めたものである。

これを読む前に、木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中公新書、および、杉原厚吉(1994)『理科系のための英文作法』中公新書、を読むべきである。(特に後者を薦める。)なお、いくつかの点については橋本日出男先生の指導にも大きく負う。もちろん、この小文におけるありうべき誤りのすべては筆者に帰されるべきである。

科学論文の役割

文章、とりわけ科学論文を書く目的はひとつの結論を証明することである。形式上は「ひとつの結論を導く」ように書かれるが、実質はそうではなくまず命題を提示し、その真偽を証明してみせるのである。結論は論文の着地点である。論文は、研究成果を他人に理解してもらうために書くのである。(決して自分のためだけに書くのではない。)成果が出たから発表するのであり、著者には成果はあらかじめわかっている。著者は、着地点にちゃんと降り立つ操縦をしなければならない。論文中のすべての構成要素が、章立てから一語一句まで、着地点を指し示していなければならない。論文個々に事情は異なるし、執筆者によって形式も異なるだろう。しかし、じっと眺めていると、その中にも何か共通しているものがある。以下に文章を書く上での目印を、いくつかの切り口でまとめる。

順序 ノススメ

ことをなすには順序が重要である。ものを述べるにも順序が重要である。重要なことは一番最初に書かなければならない。重要度の劣るものは最後に示す²。なぜなら、すべての人があなたの文章をきっちり最後まで読んでくれることなどありえないからである。(この小文自体もまた然り)読者がいつ

² 重要度が劣るものを書くときには、括弧書きや、脚注、付録を利用するのが便利である。文章が一通り完成したところで、さらにそれらの(重要性ではなく)必要性を再考せよ。本当に必要でないならば、取り除くべきである。また、字数制限等により切らなければならないなら、まずそこから切るべきである。

読むことをやめても、あなたの言いたいことが誤解なく伝わらなければならない。

基本的な書き順は次のとおり、まず命題を提示する。次にその命題の背景を示す。とくに、なぜその命題が論証すべきほどに重要なのか、誰にとってどのように重要なのか、その命題がなんの役に立つのか、などに重点を置く。それから論理の飛躍がないように論証を行う。論証に失敗すれば、どれほどその命題が魅力的なものであっても、その主張に説得力がなくなる。論証自体が長くなるならば、論証が完了した時点でもう一度命題を示して命題を読者に再認識させたり、詳細な論証は付録に納めて本文中には概略だけを述べたりすることも有用である。どの部分でも、関連した付言、例や例外、注意事項もまた同様に重要度は低い。

順序は、文章中の章配置、章中の節配置、節中の段落配置、段落中の文配置に至るまで考慮しなければならない。順序の重要さに応じて配置するのだから、第1章が最も重要であるはず。ここで読者の心をつかみ(=論文が読むに値することを納得させる)、この文章が論証しようとする命題を示して、後段において理解の助けになるよう概要を簡潔に述べるために重要である。第1節はその章において論証すべき事柄を網羅して、着地点を示すために重要である。段落中の第一文は、その段落のカギになる一文である³。ここで、この段落で言いたいことを示さなければならない。一文中においても、重要なことは一番最初に書くべきである。とくに、複文における主文と従文は、前者を先に示すべきである。日本語の特徴として、否定文か肯定文か最後まで読まなければならない構造にならざるを得ない弱点が

³ この点は「英語長文読解の基本」として広く知られているはずである。受験英語もなかなか侮れまい。

ある。これについても、語の配置を再考したり、一文を短くすること(後述)で明確にするべきである。

重要度の優劣が明確につくとは限らない。場合によると重要度がまったく同じ、並列・対比関係の章・節・段落・文があるかもしれない。その場合は、並列・対比関係を示唆する一文や接続詞を冒頭で示すべきである。たとえば、「この研究の独自性は以下の3点である」とか「以下の2要素は対立軸として重要である。前者は...、後者は...。」といったように。

短文ノススメ

一文は短ければ短いほど良い。もちろん、段落然り、章然り、そして、文章全体もまた然り。三十一(みそひと)文字の大和心を思い出せ。ひとは、たくさん書けば書くほど、より確かな論証をした気になる。これは間違いである。もちろん、必要最小限のことを論証するためにはある程度の字数が必要である。しかし、必要でありかつ、十分であればよい。たくさん書けば書くほど(1)文章の密度(結論というアンコとそれ以外のカワの分量比)が薄くなり結論の印象が薄まる、(2)読者が読了しない(最悪、まったく読まない)可能性が高くなる、(3)紙の無駄で地球環境にやさしくない。短い文章であれば読者も内容を記憶しやすい。そうすれば、読者は未永くあなたの研究を脳裏にとどめるだろう。家電製品の分厚いマニュアルを、あなたは読む気がしたろうか。風雅風流は科学論文の任にあらず。枕詞はすべて切る。

一文の長さは、単文の場合にはそれほど長くない。重文や複文になったときに長くなりがちである。したがって、文と文をつなぐ接続詞(あるいは関係代名詞)ももう一度考え直すべきである。接

続詞を使っていたらずらに文と文を接合せずに、それらを分割すると読みやすくなることも多い。

結論 ノススメ

すべての文章、章、節、項、段落には結論がなければならない。あなたは何のためにその文章を書いているのか。すなわち、第一に、文章には結論が必要である。これは、数学の証明問題であれば「命題」と呼ばれるものである。文章のすべての個所でなされることは、この結論を証明することである。そのための証拠を、各章、各節等において系統立てて論証する。各部分における論証の結果（小結論）は、当然、それぞれにおいて示されていないといけない。文章が完成したら、すべての小結論を集大成した結果が最終的な結論を最初の見込みどおりにしっかりと証明しているかどうかを(批判的に)確認・検証することが肝要である。

結論を十分に示唆する表題を、各節の冒頭に付するのは良いこと。ただし、間違った表題を用いた場合の悪影響もまた大きい。読者に誤解を与える原因になる。

接続詞熟考 ノススメ

接続助詞の「が」(主格の格助詞ではない)を用いると文章が次の2点で悪くなる。1つ目は文章があいまいになることである。なぜなら、その接続詞自体の意味が不明確だからである。単なる順接か、あるいは逆接か、一読しただけではよくわからないことが多い。2つ目は、たとえその意味が自明な場合でも、順接の場合は無用に一文を長くし、後者の場合には論理を混沌とってしまう可能性がある

いう点である。

論理を混沌とさせるという悪い点については、さらに、逆接の接続詞一般について指摘できる。逆接の接続詞が多用された場合、文章の内容が肯定・否定が二転三転する。たとえば、「彼には甲という悪い点があります、しかし、乙という良い点もあります。けれども同時に丙という弱点も指摘されなければなりません。」という文章はいったい何を意味するのか。彼は結局どういう人間なのだろうか。

これらの 2 つの悪い点を解消する手がかりは以下の 2 つである。第一は、「が」を可能な限り使わないことである。順接ならば、接続詞を使わずに 2 文に分割することを考慮すべきである。もし順接、とくに、並列・対比の関係を述べたいのであれば、それに適した接続詞が日本語には用意されているのであるから、それを用いるべきである。第二は、逆接の接続詞を多用して混沌としてしまった論理を解消するためには、性質の類似した要素同士をまとめて示すことが有用な手法である。すなわち、先ほどの例であれば、「彼には甲と丙という長所があります。もちろん、乙という悪い点があるので、その分珠に傷です（あるいは、その点ゆえに人間失格です）。」とすればすっきりとした文章になる。

逆接の接続詞ほど邪悪ではないけれど、順接の接続詞(類)もまた論理構造を混沌とさせる。たとえば、「甲は乙である。また、丙は丁である。また、...」となっていては、いつになったら終わりになるのか分からない。その上、それらの間が連続的な論理展開になっているのか、それとも、並列なのか分からない。どちらの場合も、「また」でつなぐことができるからである。

語尾断言 ノススメ

あいまいな表現を排すること。語尾や言葉を濁すべからず。そもそも文章の結論として、ある明確なものを選定してあるはずである。(不明確なものは結論になりえない。結論の設定方法や内容についての吟味は重要な問題であるけれども、それはこの小文の目指すところではない。)自ら発見したある明確なことから主張・論証することが文章の目的なのだから、明確に言い切らなければならない。もちろん、学問的・科学的な観点から明確に言い切ることができないことはありうる。あるいは、一定の決まった言い回し(二重否定)が必要な分野もあるだろう。その場合はやむをえない。さいごに、ほとんど自明だが、文体・文調を一貫させることも重要。

現在位置確認 ノススメ

第 1 章であらかじめ文章全体の構成を読者に示した。しかし、読者がいつまでもその構成を記憶にとどめながらあなたの文章を読むことは不可能である。とくに長い文章ではそうなりがちである。長い道中、要所要所に道案内の看板があるのは当然である。文章においてもまた然り。前章(前節)で何を成し遂げたか、この章(この節)で何をやるつもりで最終的にどうなるのか、読者の助けになることはすべてやらなければならない。

⁴ たとえば、仮説検定の結論において、「帰無仮説 $H_0: \mathbf{b} = 0$ が有意水準 5% で棄却されない」といった場合、(準)二重否定構文を避けて「 \mathbf{b} は零である」と言い切ることができない。

カタカナ語排斥 ノススメ

カタカナ語(外来語)を、どうしても、そこでそのように用いなければならないだろうか。再考すべし。適当な日本語があるならば置き換えるべし。もちろん、置き換えるわけにはいかないものがあるかもしれない⁵。その場合には括弧書きで併記する(あるいは意味を付す)のも一手⁶。

指示代名詞再考 ノススメ

あなたの書いた「こそあど言葉」(これ、それ、あれ、どれなど)は、本当はいったいどれを指し示すのだろうか。著者自身は自明なつもりでも、実は読者にとって自明ではないことが多い。指示代名詞が指し示す候補が複数あれば、読者は迷う、あるいは、実は指し示す対象がまったくない悪文もしばしば目にする。前文の内容を漠然と受ける指示代名詞(英語では、コンマ+which)は避けよ。

同様に、修飾語が何を修飾するのか、あいまいな文章もよくある。修飾語の後に続く被修飾語が複数ある場合、修飾・被修飾関係を明確にするために語順を入れ替えることも考慮せよ。

⁵ 「モラル・ハザード」を「道徳的危険」と訳すべきか、訳さざるべきか。それはまた少し違う問題だが。

⁶ 某監督は「まっすぐのストレートが...」が大好きだが、これはいただけない。

さて、先述のとおり長い文章は下の下である。だからこの小文もこのあたりで終わりにする。

以上

2001年1月4日初稿

2001年1月6日改稿

2001年3月22日改稿

2001年5月8日改稿

2001年5月10日改稿

2001年5月15日改稿